

乳幼児を持つフルタイム勤務女性の葛藤と その解決ならびに心理的well-being

江上 園子*

【要旨】

共働き家庭が片働き家庭を超えた我が国であるが、大きな課題として指摘されているものがwork-family conflictである。本研究では、コンフリクトがとくに高いといわれているフルタイム勤務で乳幼児を養育中の女性を対象に、仕事と家庭との間で生じる実際の「葛藤」と個人なりの「解決」について、質問紙調査の自由記述部分から回答の類型化を試み、それと発達的な適応の資料である心理的well-being得点との関連を検討した。その結果、「葛藤」がある群とない群との間で差が認められ、「葛藤あり」群では「人格的成長」の得点が高い一方で「人生における目的」の得点が低いことがわかった。「解決」については、「他者援助希求」群と「自己解決」群において「解決なし」群よりも「人格的成長」得点が高いこと、「他者援助希求」群が「あきらめ・我慢」群よりも「積極的な他者関係」得点が高いことが明らかになった。

キーワード：ワーキング・マザー、ワーク・ファミリー・バランス、心理的well-being

1. 問題と目的

現在の日本社会は従来型の「標準家族」が崩壊し（高橋，2013），女性たちの生き方が変化しつつある時代といえる。実際に，我が国で特徴的に見られたM字カーブも解消されつつあるという（厚生労働省，2016a）。しかし実際には「共働き家庭」と言っても有子女性の大半はパート職やアルバイト職に就いており，夫の扶養内での働きにとどめていようとする意思も見られる（例えば江上，2008）。そしていまだに第一子出産後に離職

*子ども学部発達臨床学科

EGAMI Sonoko：The Conflict of Full-Time Working Mothers with Young Children and their Resolution and Psychological Well-being

する女性が半数を占める（国立社会保障・人口問題研究所，2015）。この原因として，我が国の現状では，夫婦ともがフルタイム勤務では家庭生活とくに子育て役割の遂行が困難を極めるといふ現状が挙げられよう。実際に松田（2001）によると，男性は妻の職業にかかわらず「男は仕事」を遂行する一方で，職業を持つ女性は「仕事も家庭も」こなさなければならない「新・性別役割分業」の状況下にいるという。松田（2006）の研究では家庭での家事育児を夫婦協働で行う事例も増えてきたが，それは妻側の収入が夫より高く，労働時間も長い場合に限るといふ。我が国におけるこのようなケースは近年でもまだ稀少であることを考えると，フルタイム勤務で養育責任を持つ女性の抱える葛藤や困難の実態を明らかにし，その解決・調整方略について共に考えていくことが重要であろう。ところがこれまでの先行研究では，フルタイム勤務で乳幼児を養育中の女性を対象とした研究自体が稀少であるうえに，あったとしてもパートタイム女性や専業主婦との比較がメインであるもの，研究者が想定した尺度項目の高低で結論づけされたもの，実態調査や事例検討に類するものが多くを占めている（例えば小坂，2004；小坂・柏木，2005；江上，2007；中野，2014）。

海外でも，Allen & Finkelstein（2014）は，仕事においても家庭においても相当のコミットメントが求められる人物はフルタイム勤務で乳幼児を養育中の女性であると報告している。彼女たちは，根強い育児役割への専従期待とフルタイム勤務者ならではの職場への貢献を求められている上に，時間的切迫感が高く（Lewis & Cooper，1983），役割負担感が強い（Duxbury & Higgins，1991）。

一方で，育児ストレスはワーキング・マザーではなく専業主婦の母親に多いことも知られている（例えば村上・飯野・塚原・辻野，2005）。土肥・広沢・田中（1990）でも，仕事と家庭という多重役割を持つ女性たちの「生活満足感」は高いという結果が示されている。Greenhaus & Powell（2006）たちによると，仕事と家庭という双方の世界を持つことで，両者に良い影響がもたらされるという“work-family enrichment”という現象も指摘されるのである。

それでは，子育て期にフルタイム勤務をしている女性たちにおいて，どのような要因やとりまく状況が彼女たちの適応や発達と関連しているのだろうか。本研究ではこれを明らかにするために，適応と発達についての指標として西田（2000）で作成された心理的well-being尺度を用いる。これは，多くの先行研究によって明らかにされている成長と衰退の両側面を含む複数の心理的指標と言え，人生全般にわたるポジティブな心理的機能を測定しうるものである。それゆえに，女性たちの適応だけではなく発達の側面も含められた項目から構成されている。フルタイム勤務で乳幼児を持つ女性において，両立にかかわる「困難」や「葛藤」は，女性たちの適応や発達を阻害するのだろうか。それともむしろ促進させうる場合もあるのだろうか。それは「困難」や「葛藤」の内容に由来するのだろうか。そしてそのような「困難」や「葛藤」を「解決」・「調整」しうる方

略を女性たちは持ち合わせているのだろうか。それは実際にどのような方略スタイルだろうか。どんな方法を用いるかということが、女性たちの適応や発達を左右しうるのだろうか。本研究は、フルタイム勤務で子育て中の女性たちを対象に、女性たちが抱える「葛藤」とその個人なりの「解決」について質問紙自由記述の回答から実態を把握し類型化を試みることで、彼女たちが有するパターンやスタイルと適応や発達との関連を調べることを目的とした。そして最終的には、本研究で対象としたような女性たちにとって必要な視点や援助の観点について議論も行いたい。

II. 方法

1. 対象者

乳幼児を養育中で、フルタイム勤務の女性370名が調査対象者であった。そのうち、サンプル同質性の観点から、配偶者がいる女性を抽出した。平均年齢は34.5歳 (SD:5.0)、世帯年収最頻値は600万～800万円未満 (21.6%) であった。

2. 手続き

インターネットリサーチ会社に依頼して、インターネット上で無記名式のアンケート調査を行った。その結果、全体で824名の女性に対して回答を得ることができた。その中で対象者選定の方法は先述した通りである。

3. 調査項目

年齢や就業形態などを問うフェイスシート項目の他、次の2つの設問について自由回答を求めた (「①仕事と家庭との両立で生じる葛藤や困難はありますか」、「②両立によって生じた葛藤や困難について、どのように調整し解決をはかりますか」)。心理的well-being尺度 (西田, 2000) 43項目について、「1:全くあてはまらない～6:非常にあてはまる」の6件法を用いて回答を求めた。

III. 結果

1. 自由記述回答のカテゴリ化

「①仕事と家庭との両立で生じる葛藤や困難」(以下「葛藤」と示す)において得られた全回答について、KJ法に準じて類型化を試みた。KJ法を採用した理由は、データをボトムアップ的にカテゴリ化する際に使用する方法であり、本研究のように多くのデータを整理することに有用 (田中, 2011) だからである。その結果、「なし (19.2%)」「子どもへの罪悪感 (15.4%)」「両立におけるプレッシャー (14.9%)」「時間のなさ (13%)」「夫

への不公平感 (8.4%)」「会社の無理解 (7.6%)」「家事遂行にかかわる懸念 (6.8%)」「体力面での疲れ (4.3%)」「社会に対する不満 (3.2%)」「キャリアへのあきらめ (2.7%)」「職場への迷惑 (2.4%)」「子ども疾病時のやりくり (2.2%)」に分類できた。

「②葛藤や困難に対する調整ならびに解決」(以下「解決」と示す)において得られた全回答について、KJ法に準じて類型化を試みた。その結果、「夫への働きかけ (23.2%)」「あきらめ・我慢 (12.2%)」「なし (11.1%)」「親族によるヘルプ (9.7%)」「気分転換 (9.5%)」「自分なりの工夫 (8.4%)」「職場への働きかけ (7.3%)」「周囲への相談 (6.5%)」「手抜き (5.4%)」「思考の転換 (3.5%)」「転職・時短勤務への変更 (2.4%)」「サービスの利用 (0.8%)」に分類できた。

なお、2つの設問ともに個人で複数回答が見られた場合は最初に回答していたものを排他的に優先した。また、本来、KJ法は評定者間一致率を算出する必然性はない(田中, 2011)が、筆者による恣意的なカテゴリ化を避けるため、すべての回答のうちランダムに選択した20%の回答について心理学専攻の大学院生による回答と評定者間一致率を算出した。その結果、①は82%で②は77%であった。②は一致率が80%を超えなかったが、カテゴリが12種類と多くの分類であることやそもそも一致率は副次的に求めたものであるため、今回の分類結果を採用した。一致しなかった回答については、筆者と評定者として話し合いを試みて最終的に一致させたいうえで分類を決定した。それぞれの設問で得られた回答例は表1及び表2に示した。

次に年齢ならびに世帯年収と「葛藤」「解決」とのカテゴリで連関があるかどうか検討したところ、有意な連関は認められなかった。したがって分析の際にはこれらの変数を除外して行うこととした。

表1. 自由記述①における回答のパターンと回答例および回答率 (%)

「葛藤」のパターン	回答例	回答率 (%)
なし	いまのところない	19.2
子どもへの罪悪感	小さい子どもを保育園に預けて仕事することに罪悪感を感じている	15.4
両立におけるプレッシャー	今は問題なく両立ができていますが、どちらかにバランスが偏った時に対応できるかわからず不安	8.4
時間のなさ	時間に常に追われてしまう	13.0
夫への不公平感	夫との家事、育児の分担がどうしても自分の方が負担が重く、ストレスを感じている	14.9
会社の無理解	何か子供にあった時、すぐに迎えに行けない職場環境なので、ストレスを感じている	7.6
家事遂行にかかわる懸念	子育ても仕事も頑張っているが、家事の時間が取れない	6.8
体力面での疲れ	体力がもたず、精神面でも支障をきたすことがある	4.3
社会に対する不満	周りの関係する人達が男女平等に対する意識を正しく持つ社会になる必要がある	3.2
キャリアへのあきらめ	保育園など時間の都合で本当にやりたい仕事につくことが出来ない	2.7
職場への迷惑	保育施設への送迎などで残業もできず、他者に迷惑をかけているのが精神的にしんどい	2.4
子ども疾病時のやりくり	子供が急に病気になった際の対応が困難	2.2

表2. 自由記述②における回答のパターンと回答例および回答率 (%)

「解決」のパターン	回答例	回答率 (%)
夫への働きかけ	夫に相談し協力を仰ぐ	23.2
あきらめ・我慢	自分に仕方ないと思わせている	12.2
なし	ないから困っている	11.1
親族によるヘルプ	時には両親の手を借りながらなんとかやりくりしている	9.7
気分転換	友達と出かけておしゃべり	9.5
自分なりの工夫	とりあえずできることから片づけていく	8.4
職場への働きかけ	仕事の調整はひたすら頭を下げて願う	7.3
周囲への相談	周囲と相談する	6.5
手抜き	ご飯が手抜きになる	5.4
思考の転換	いまは子どものことを優先し、仕事のことは割り切って考えるようにしている	3.5
転職・時短勤務への変更	転職を検討	2.4
サービスの利用	外注する	0.8

2. 心理的well-being尺度得点の比較

心理的well-being尺度（西田，2000）43項目は先行研究によれば「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「自己受容」「環境制御力」「積極的な他者関係」の6つの下位因子から構成されている。サンプルの性質や標本変動の可能性も考慮したうえで、本研究は南風原（2005）に則り、先行研究の因子構造に倣って各下位因子で合計得点を算出した。そしてその得点を従属変数として対応のない t 検定ならびに分散分析を行うこととした。なお、それぞれの因子に含まれる項目は表3の通りである。

表3. 心理的well-being尺度の各因子における項目

因子名	項目例
人格的成長	これから、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う 新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい 私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う* これ以上、自分自身を高めることはできないと思う* 自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う 私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである 私の能力は、もう限界だと思う* 私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程である
人生における目的	私は現在、目的なしにさまよっているような気がする* 私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見出せない* 本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない* 自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている 私はいつも生きる目標を持ち続けている 私は、自分が生きていることの意味を見出せない* 私の人生は退屈で、興味がわかない* 私は、自分の将来に夢を持っている
自律性	私は何かを決めるとき、世間からどうみられているかとても気になる* 重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る* 自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい* 自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである* 何かを判断するとき、社会的な評価よりも自分の価値観を優先する 私は、自分の行動は自分で決める 自分の行動を決定するとき、社会的に認められるかどうかをまず考える* 習慣にとらわれず、自分自身の考えに基づいて行動している
自己受容	私は自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる 私は、自分自身が好きである 私は、自分の性格についてよく悩むことがある* 良い面も悪い面も含め、自分自身のありのままの姿を受け入れることができる 私は、今とは異なる自分になりたいとよく思う* 私は、これまでの人生において成し遂げてきたことに、満足している 私は、自分に対して肯定的である
環境制御力	私は、うまく周囲の環境に適応して、自分を生かすことができる 状況をよりよくするために、周りに柔軟に対応することができる 自分の身に降りかかってきた悪いことを、自分の力でうまく切り抜けることができる 自分の周りで起こった問題に、柔軟に対応することができる 私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分で作り上げたものである 私は、周囲の状況にうまく折り合いをつけながら、自分らしく生きていると思う
積極的な他者関係	私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている 他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う* 私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった* 私は他者といると、愛情や親密さを感じる 私は他者に強く共感できる 自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う

注) *は逆転項目である

「葛藤」に関する自由記述①の回答で分類した12群を独立変数、心理的well-beingの下位因子得点それぞれを従属変数とした分散分析を行った。その結果、すべての因子得点において群による有意差は見られなかった。極端に人数が少ない群もあったことから「葛藤」について挙げた女性たちを「葛藤あり」群（80.8%）、葛藤はないと回答した母親を「葛藤なし」群（19.2%）とし、心理的well-being得点の高低を調べた。その結果、「葛藤あり」群では「人格的成長」の得点が高い（ $t(368) = 2.03, p < .05$ ）一方で「人生における目的」の得点が高い（ $t(368) = 2.36, p < .05$ ）ことがわかった。結果を図1・図2に示す。

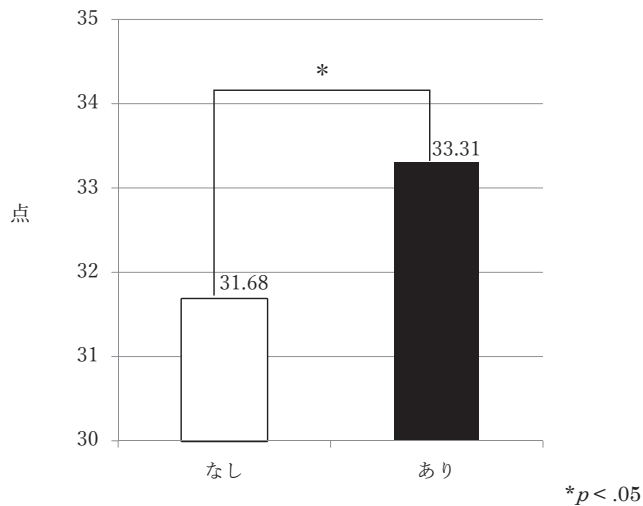


図1. 「葛藤」の有無における「人格的成長」得点（範囲：8-48）の結果

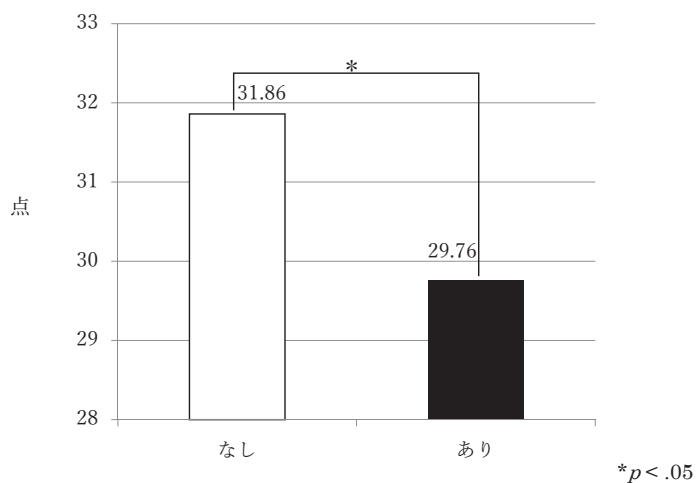
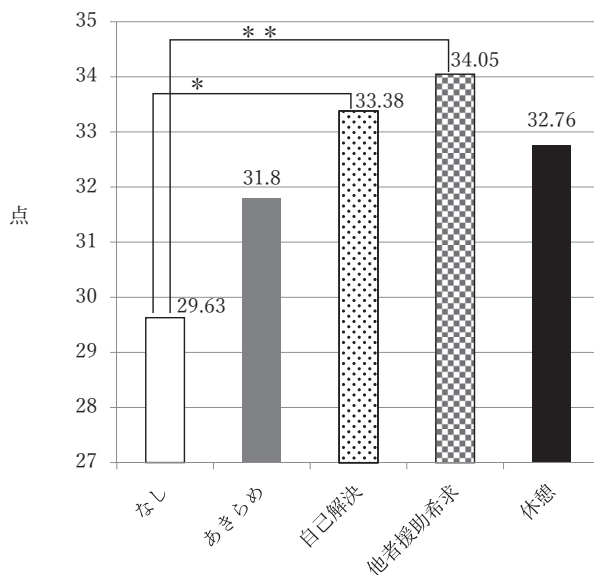


図2. 「葛藤」の有無における「人生における目的」得点（範囲：8-48）の結果

「解決」に関する自由記述②の回答で分類した12群についても、極端に少ない人数の群があることから、「解決」のスタイルについてその内容から次のようにまとめて分類し直すこととした。「周囲への相談」「夫への働きかけ」「職場への働きかけ」「親族によるヘルプ」「サービスの利用」について挙げた女性たちを「他者援助希求」群（47.5%）とし、「手抜き」「気分転換」と回答した群を「休憩」群（14.9%）、「思考の転換」「転職・時短勤務への変更」「自分なりの工夫」と回答した群を「自己解決」群（14.3%）として、「あきらめ・我慢」群（12.2%）と「なし」群（11.1%）との5群による心理的well-being得点の高低を調べた。その結果、「人格的成長」($F(4,365)=4.93, p < .01$)ならびに「積極的な他者関係」($F(4,365)=2.77, p < .05$)において群による有意差が認められた。多重比較の結果、「なし」群よりも「自己解決」群及び「他者援助希求」群の方が「人格的成長」得点が有意に高いことがわかった（順に $p < .05, p < .01$ ）。また、「あきらめ・我慢」群よりも「他者援助希求」群の方が「積極的な他者関係」得点が有意に高いことがわかった（ $p < .05$ ）。これらの結果は図3・図4に示した。



** $p < .01$, * $p < .05$

図3. 「解決」スタイルにおける「人格的成長」得点（範囲：8-48）の結果

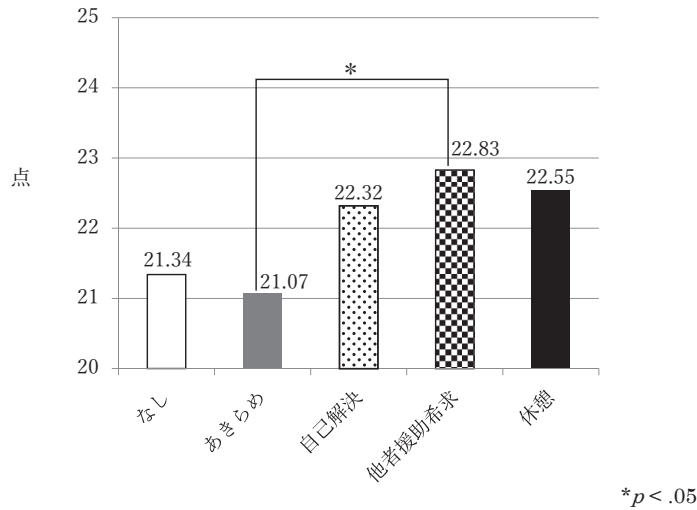


図4. 「解決」スタイルにおける「積極的な他者関係」得点（範囲：6-36）の結果

IV. 考察

本研究の目的は、乳幼児を養育中のフルタイム勤務女性たちが抱える「葛藤」とその個人なりの「解決」について質問紙調査の自由記述部分から類型化を試み、「葛藤」や「解決」のパターンやスタイルと女性の適応・発達との関連を探るものであった。さらに、女性たちが家族や職場へ変化を働きかける割合やその意義についても討論する目的もあった。

その結果、以下のことが示唆された。まず、「葛藤」については、「なし」と述べる女性の数も一定数で見られながら、一方で「あり」と回答する女性たちと適応・発達の差の高低が心理的well-being全体では明確に見いだせなかったことについて述べる。「なし」と回答した女性たちは「人生における目的」得点は高くとも、「人格的成長」得点が低いという結果となった。西田（2000）によると、「人生における目的」については現在と過去の人生に意味を見出しているという感覚であるという。「葛藤」について述べている女性は、どんな理由があるにせよ、両立に苦慮しながら職業を持っている。しかし、その自分の人生に対して少なくとも調査時点では自信を持っておらず、意味を見出しにくいという状況であるということだろう。一方で「人格的成長」については、自分自身が進歩している感覚や新しい経験に開かれている感覚を意味することから、「葛藤」があると感じている女性の方が、両立にかかわる「葛藤」の中でも何とか踏みとどまり、成長していく意思を持っているという姿がうかがえる。「葛藤」の内容については、「子どもへ

の罪悪感」が15.4%、続いて「両立におけるプレッシャー」が14.9%、「時間のなさ」が13%となっている。「子どもへの罪悪感」については、国内・海外を問わず多くの研究で母親が抱く感情として示唆されている（Hays, 1996, Shelton, 1999; 濱田, 2005; 石野, 2007）。江上（2017）でも示している通り、職場等での男女平等にかかわる意識と、家庭での子どもに関する「母親の愛情」という意識は別のものである。そのため、女性ではたとえ男性と同じように働いて「活躍」しつつも、それで子育て役割が多少なりとも単純に割り引かれるわけではない。フルタイムで働く女性自身の間でも、「母親の愛情」といういわばアンコンシャス・バイアス（加藤・中坪, 2018）が作用しているという証左であるとも言えよう。「両立におけるプレッシャー」については、お互いにフルタイム共働きの夫婦でさえ家庭役割を担っているのは女性であるという現実、ならびにそれに伴う家庭責任への重圧（柏木・加藤, 2016）を反映していると考えられる。「時間のなさ」に関しても、「セカンド・シフト」（Hochschild, 1990）や「タイム・バインド」（Hochschild, 2012）という現象は明らかであり、実際に土肥・広沢・田中（1990）が指摘している通り、仕事と家庭との多重役割を持つ女性の役割過負荷は強い。フルタイムで働く母親に対して、人々の意識や行政など社会全体でソフト・ハード両側面からの、さらには両側面を連動させた援助や変革が必要となるだろう。

次に、「解決」については「夫への働きかけ（23.2%）」を含めた「他者援助希求」が47.5%とかなりの数を占めている。そして順に「休憩」群（14.9%）「自己解決」群（14.3%）「あきらめ・我慢」が12.2%という結果となった。「なし」と回答する女性も1割ほど見られた。「解決」する方法がないという女性、あきらめてしまったり我慢してしまったりする女性が相当数見られるということは問題であろう。実際に「人格的成長」でも「積極的な他者関係」でもいずれの群も低い得点となっており、これらの状況が続けば心理的well-beingがさらに低下していくという懸念も払拭できない。これらの女性たちが他者の援助を求めたり自分なりに解決を試みたりできない背景にはどんな要因があるのだろうか。Jaectel（2012）たちにあるように、サポートの相互性を満たさないという信念からなのか、あるいは以前は解決しようと試みたがうまくいかなかったという経験からなのか、詳細に丁寧に分析していくことが今後の課題である。その他、「他者援助希求」の中でも「サービスの利用」と回答した女性もかなり少なかった。これは我が国の先行研究（例えば大野・菅野・柏木, 2001）とも一致する結果であるが、なぜ家事育児の「外注」がこれほどまでに進まないのだろうか。金銭的な要因以外ではやはり家事や育児は「私的」な領域の問題とされてきた（関井・斧出・松田・山根, 1991）という歴史の名残も挙げられるだろう。なお、「解決」スタイルと心理的well-beingとの関連においては、他者に働きかけたり援助を求めたりする「他者援助希求」が、フルタイム勤務で乳幼児養育中の女性における心理的な発達や適応を促進する可能性が見出されたことは興味深い。関連が想定されやすい「積極的な他者関係」得点以外でも、自分で方策を考え解決

する「自己解決」型の女性たちより「人格的成長」の得点が高いものとなっている。大人の発達も、自分の力だけでなされるものではないということである。Rizzo, Schiffrin, & Liss (2013) や Liss, Schiffrin, & Rizzo (2012) の研究からも言える通り、母親が一人で子育てを背負い込もうとすること、育児の要求水準を上げることは逆説的にその母親たちの適応や発達を阻害するのである。母親にとってのサポート希求の重要性や必然性を社会的に訴えていく必要がある。

最後に本研究の課題について述べる。1点目は、葛藤・困難のタイプと解決・調整スタイルの関連について検討することである。本研究はそれぞれ独立のものとして分析し、それぞれで類型化を試みたうえで心理的well-beingの得点差について検証しているのみである。今後は、どんな葛藤・困難のタイプの母親がどのような解決・調整スタイルを用いることで心理的well-being得点が高くなるのか（あるいは低くなるのか）ということもあわせて探っていく必要があるだろう。2点目は、葛藤・困難とその解決・調整についてデータ収集したのちに、心理的well-being得点を測定するという縦断的な研究計画を想定しておくということである。本研究は、すべての関連が1時点のみの結果となっているが、葛藤・困難についての解決・調整を経ることで自信や余裕が生まれ、のちの心理的well-beingが向上する可能性がある。どのような葛藤・困難でこういった解決・調整を取れば心理的well-beingのどの部分が向上するのか（あるいはむしろ低下するのか）明らかにすることで、現在、仕事と家庭との両立で奔走している女性たちに対する実践的な示唆も得られるだろう。

【引用文献】

- Allen, T. D., & Finkelstein, L. M. (2014). Work-family conflict among members of full-time dual-earner couples: An examination of family life stage, gender, age. *Journal of Occupational Health Psychology, 19*, 376-384.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫 (1990). 多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果—, *社会心理学研究, 5*, 137-145.
- Duxbury, L. E., & Higgins, C. A. (1991). Gender differences in work-family conflict. *Journal of Applied Psychology, 76*, 60-74.
- 江上園子 (2007). “母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響：職業要因との関連, *心理学研究, 78*, 148-156.
- 江上園子 (2008). 子育て期にある母親の「母性愛」信奉傾向における主観的な意識, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化創成科学論叢, *11*, 421-430.
- 江上園子 (2017). キャリア志向の女性における出産前後の「母性愛」信奉傾向の変容, *発達心理学研究, 28*, 154-164.
- Eyer, D. (1996). *Mother guilt: How Our Culture Blames Mother for What? Wrong with Society.*

- New York: Times Books.
- Greenhaus, J. H., & Powell, G. N. (2006). When work and family are allies: A theory of work-family enrichment. *Academy of Management Review*, 31, 72-92.
- 南風原朝和 (2005). 統計学と心理学——個を重視する統計学の観点から 下山晴彦 (編著) 心理学論の新しいかたち. 東京: 誠信書房.
- 濱田維子 (2005). 仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響, 日本赤十字九州国際看護大学紀要, 3, 147-158.
- Hays, S. (1996). *The Cultural Contradictions of Motherhood*. New Haven: Yale University Press.
- Hochschild, A. (1989/1990). セカンド・シフト 第二の勤務—アメリカ 共働き革命のいま (田中和子, 訳). 東京: 朝日新聞社.
- Hochschild, A. R. (2001/2012). タイム・バインド (時間の板挟み状態) 働く母親のワークライフバランス—仕事・家庭・子どもをめぐる真実— (坂口緑・中野聡子・両角道代, 訳). 東京: 明石書店
- 石野陽子 (2007). 母親が子どもに抱く罪障感の心理学的研究. 東京: 風間書房.
- Jaekel, D., Seiger, C. P., Orth, U., Wiese, B. S. (2012). Social support reciprocity and occupational self-efficacy beliefs during mothers' organizational re-entry. *Journal of Vocational Behavior*, 80, 390-399.
- 柏木恵子・加藤邦子 (2016). 育児不安を考える——ライフコースの激変とアイデンティティの揺らぎ 柏木恵子・高橋恵子 (編) 人口の心理学へ——少子高齢社会の命と心. 東京: ちとせプレス.
- 加藤望・中坪史典 (2018). なぜ日本の乳幼児子育て期の保護者はリフレッシュ目的で一時的預かり事業を利用しにくいのか? 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 67, 57-64.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 2015年社会保障・人口問題基本調査<結婚と出産に関する全国調査>第15回出生動向基本調査結果の概要. <http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_gaiyou.pdf>
- 小坂千秋 (2004). 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因: 就業形態からの検討, 発達研究, 18, 73-87.
- 小坂千秋・柏木恵子 (2005). 育児期フルタイム就労女性の育児への態度・感情, 発達研究, 19, 81-96.
- 厚生労働省 (2016a). 平成27年版働く女性の実情. <<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/15b.pdf>>
- Lewis, S., & Cooper, C. L. (1983). The stress of combining occupational and parental roles: A review of the literature. *Bulletin of the British Psychological Society*, 36, 341-345.
- Liss, M., Schiffrin, H., & Rizzo, K. (2012). Maternal guilt and shame: The role of self-

- discrepancy and fear of negative evaluation. *Journal of Child and Family Studies*, 22, 1-8.
- 松田茂樹 (2001). 性別役割分業と新・性別役割分業—仕事家事の二重負担—. *哲学*, 106, 31-57.
- 松田茂樹 (2006). 近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化. *季刊家計経済研究*, 71, 45-54.
- 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子 (2005). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析. *小児保健研究*, 64, 425-431.
- 中野円佳 (2014). 「育休世代」のジレンマ：女性活用はなぜ失敗するのか？ 東京：光文社.
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究, *教育心理学研究*, 48, 433-443.
- 大野祥子・菅野幸恵・柏木恵子 (2001). 家庭内の家事分担と家族の属性の関連, *発達研究*, 16, 53-68.
- Rizzo, K., Schiffrin, H., & Liss, M. (2013). Insight into the parenthood paradox: Mental health outcomes of intensive mothering. *Journal of Child and Family Studies*, 22, 614-620.
- 関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理 (1991). 働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク, *家族社会学研究*, 3, 72-84.
- 高橋恵子 (2013). 絆の構造：依存と自立の心理学. 東京：講談社.
- 田中博晃 (2011). KJ法入門：質的データ分析法としてKJ法を行う前に, より良い外国語教育研究のための方法：外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会2010年度報告論集, 17-29.

【付記】

本研究は愛媛大学教育学部での研究倫理審査委員会の承認を受けて実施したものである。本研究にご協力下さいましたすべての女性に厚く御礼申し上げます。また、本研究は日本発達心理学会第30回大会でのラウンドテーブル「伝統的なジェンダー役割観は変わりうるのか—その兆しを探る—」において発表した研究を論文化したものである。ラウンドテーブルの際に指定討論者として多くの貴重なご示唆を頂戴しました高橋恵子先生（聖心女子大学名誉教授）、企画・話題提供者の大野祥子先生（白百合女子大学）・平井美佳先生（横浜市立大学）、話題提供者の渡邊寛先生（筑波大学大学院）に心より感謝申し上げます。なお、本研究は科学研究費・若手研究（B）（課題番号：23730616）による助成を受けた。

えがみ そのこ（発達心理学）

